

読書への誘い^{いざな}

本を読むというのは、どんな目的でなされることなのだろうか。たくさん本を読めば知識が増える。それはもちろん望ましいことだろう。しかし最近のネット社会の時代では、知識だけだったらもっと手軽に集めることができる。といっても、断片的な知識を数多く寄せ集めるだけでは、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。教養と学識は似ているようで違う。一つひとつの知識や情報を、目に見えないかたちで、文字にも書かれていないしかたで、背後からつないでいるもの、それは書き手の生きている「世界」なのだろう。

ある人の書いた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にかその人が生きている、その人だけの世界にはいりこむことになる。だれかと瞬間的に世界を共有するというだけなら、ネット上での交流でも十分に可能だろう。しかし、ある人が歳月をかけて作り上げたその人だけの世界に、何日もかけて持続的に住み着くということになると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界をいくつも体験することで、読者の世界にはだんだん幅ができてくる。この幅のことを教養というのだろう。

教養は受験には直接の役に立たないかもしれない。しかし教養は手持ちの知識を有機的につないで、知識の量よりもその質を高めてくれる。塾生の諸君に良質の読書をお勧めするのはそのためである。